集英社

「やさしき夜の物語」奥附
昭和三十七年十一月十五日　初版發行
昭和四十九年十月二十五日　再版發行
著者圓地文子　發行者陶山巖　印刷者
北島義俊　發行所株式會社集英社　千
代田區一ツ橋二丁目五番地十號　郵便
番號一〇一番　電話番號東京二六五局
六一一一番　印刷所大日本印刷株式會
社　製本所有限會社石橋製本工場
檢印廢止　定價七八〇圓

落丁亂丁本は、お取替え致します。

© 1962 Fumiko Enchi　Printed in Japan

やさしき夜の物語　目次

第一章……五
第二章……三五
第三章……七五
第四章……一一三
第五章……一五一
「夜半の寝ざめ」について……二三七

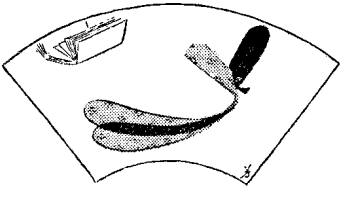
裝釘
挿繪

佐多 芳郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

やさしき夜の物語

第一章



綾の姫はうつとり眼を見ひらいた。枕もとに立てた几帳や壁紙の帷子(かたびら)が、灯の光とは違ふ白さに明るんで來てゐるのは、簀子の格子の間から曉の光が忍びこんで來たからであつた。小鳥の鳴き交すのに交つて、鷄の刻の告げる聲の勢よく聞えるのも、都の屋敷では知らなかつた田舍びた風情である。西山といつてもこの山莊のある廣澤のあたりは大きい池を中心にして眺めが廣く開けてゐるので、背後の山の樹々の綠が細やかに見分けられるだけで、山中に住んでゐるといふ淋しさはない。ただ、霧は深く、朝夕の氣溫も都より低いので、櫻の花の咲くのがこの春は去年より晩く思はれたものである。その櫻も、池の畔を一面のうす紅(くれなゐ)に染めてこの四、五日は見事に咲き揃つた。今日あたりからはも

う白い雫のやうに花が散りはじめることであらう。

姫は小さい頭を四角い唐綾の枕の上でそつと動かして隣りに寢てゐる對の君の方を見ようとした。たつぷり艶をふくんだ漆のやうに黑い髪が小さい頭から溶け流れるやうに枕を滑り落ちて、枕もとの青貝を鏤めた御髪筥の中に堆くたまつてゐたのが、姫の頭を起したのに連れて引よせられるやうにするするとたぐられて背を蔽つた。

對の君はつつましく袖で口蔽ひしたまま、ひつそり眠つてゐた。姫に似た面ざしの瞼や頰に流石に三十を越した年のやつれが見えて、世の中を知らぬ姫にはこの母代の從姉のやさしさが、又なく賴りになるのであつた。從姉と云つても對の君は表て向き姫の乳人のやうな身分であつた。亡くなつた母君が、兄の娘の一人を幼い時から手許に引きとつて養育したのであつたが、北ノ方の死後は姉妹の內でもいとけなかつた綾の姫に附ききつて母代りに育てて來た。その

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

間には今は入道して佛道以外の俗念を斷つてゐる姫達の父の太政大臣政道が、閨淋しさにものを言ひかけたことなどもあつたが、對の君はそのことによつて、大臣家の中で自分の地位を高めようなどとゆめにも思はない溫順な生れつきであつたから、一時大殿との間にさうしたことのあつたのをかへつてはづかしいことに祕し隱してゐた。姉の吳羽姫の乳人達は對の君の若く美しいのをそねんで、「今北ノ方」などと渾名して意地惡く當るので、對の君はますます綾の姫の蔭に身をかくすやうにしてこの年月を暮らして來た。

思ひかけぬことで、綾の姫は姉の吳羽姫に憎まれる身の上になつた。姉のさう思ふのには無理のない理由のあることが解つてゐるほど、幼い時から睦みあつて來た姉妹仲の氣まづくなつたことが綾の姫には辛いのであつた。

父の入道の耳にも異母兄の左衞門督(かみ)や宰相からそのことが聞えて來たので、入道は取りあへず自分の退隱してゐる廣澤の山莊へ綾の姫をひき取つたのであ

る。姉婿の大納言宗平と綾の姫が通じてゐる。しかも、人知れず子供さへ生んだときいて、とり分け綾の姫を鐘愛してゐる入道は呆れもし怒りもしたが、廣澤へひきとられて來た姫の面痩せて憂ひをふくんだ顏を見ると、祕事を聞き知つた顏をするのさへいとほしく思はれて、叱責する氣にはならなかつた。

綾の姫の健康は氣の置ける姉のもとを離れてから、少しづつ回復して來るやうに見えたが、もの思ひは深くなるばかりであつた。

昨日も對の君と一緒に黃昏れ時の泉殿に立ち出て、庭に堰き入れた池水に、汀の櫻が美しく映えてゐる景色を見ながら、姫は心ともなくくちずさんだ。

咲き匂ふ花も霞ももろともに
見しに變らぬ春の黃昏

對の君にも姫の姉姫を慕ふ心が滲み通つたと見えて、その歌を口の中で繰返しうつむいた睫毛にはしつとり涙が宿つてゐた。

姫は今對の君の寢顏を見ながらその歌を思出してゐた。自分達姉妹の生れる時から、母の側にかしづいてゐた對の君は、姉と自分とが仲のよい姉妹であつたことを誰れよりもよくよく知りわけてゐる筈であつた。

雙六(すごろく)も碁も雛遊びも、母のない姉妹はいつも一緒にして、睦じく暮らして來たのに何といふ運命の悪戯で自分は姉の夫となるべき人に、身を任せる緣を結ばれてしまつたものであらう。綾の姫はほつと吐息きを吐いた。春と云ひながらこのあたりの曉方の大氣の冷えは姫の小さい息を白く浮き上らせた。

「お眼がさめていらしつたのですか」

と對の君が言つて、靜かに身を起しながら、裾にあつた小袿(こうちぎ)をあらはな姫の小袖の肩にそつと着せかけた。

「ええ、もう少し前に……」

綾の姫はさりげなく言つた。言ひながらふと夜中におびえた聲を上げて、對

の君に搖り起されたことを思ひ出してゐた。

「あれからすやすやおやすみになりましたね。姫がおねつきになつたので、私もいつの間にかうとうと寢入つてしまひましたが・・・」

對の君はねまきの衿もとをかきつくろひながら、姫の長い髪を重たさうに兩手に持つて裾の方を金銀の摺箔(すりはく)した紗の袋に入れた。白い紗は黑い髪束を透かせて姫の背の下に猫のやうに軟かく置かれた。それは顏を洗つたり、衣裳をかへたりする間の朝々の習慣であつたが、對の君はこの美しい髪を手にするごとに、これがなかつたらば、姫の人生は翳のないものになつたかも知れないと言ひしれぬ嘆きに胸が痛むのであつた。

「何のゆめを御覽になりましたの、覺えていらつしやいますか」

「いいえ、はつきりとは・・・」

綾の姫はやはらかく首を振つてうつむいたが、その時實ははつきりと宗平大

納言が自分の上にゐて、何かささやいてゐたのと、それをかきのけるやうに青白く凝つた姉の顔が自分を見据ゑたのとを思出してゐた。姉は長い爪のある手で熊手のやうに宗平をかきのけて、その爪が無雜作に綾の姫の顔を掻いた。痛みは身に覺えなかつたのに、言ひやうなく怖しくて、聲を上げようとしても聲が出ず、身動きも出來なかつた。

「お汗をじつとりかいていらしつたわ。お起きになつてからお肌着を替へませう」

「ええ」

姫は素直に言つた。

「でもまだ早うございますわ……下仕への女達もまだ起きてまゐりませんもの……もう少しおやすみになつたら……」

對の君はやさしくすかすやうに言つたが、姫は首を振つて、

「お寫經をしようと思ひますの・・・・昨日お父様に頂いた大后さまの御寫しになつたといふ御經の文字がほんたうに美しい正しい御手蹟で眞似をしたくなつたのです」

「それはよいお思ひつきですわ」

と對の君はうれしさうに言つた。

「そのお方は弘徽殿の大后さまと呼ばれて長く御一門の榮えをおひらきになつた尊いお方でございます。姫のお母さまは大后さまにお可愛がられになつて、大殿とお契り遊ばしたのださうで、御殿の御模様などもよろづ大后さまのおこのみ通りになさつていらつしやいました。大后さまの御書きになつた法華經をお手本になさつて姫がお寫しになるのはほんたうにふさはしいことですわ」

「父上さまもさうおつしやるのよ」

姫は鷹揚に答へたが、對の君には父の政道入道のその寫經をすすめる氣持ち

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com